横浜陶芸友の会だより

第１７８号
令和２年
11月15日発行

『第42回作品展』多数の出品お待ちしております

横浜陶芸友の会 会長　高橋 光男

現在私たちは新型コロナウイルスの世界的な感染という状況下にいますが、皆様いかがお過ごしですか。

2020年春から、移動制限や外出自粛、そして他者との接触制限など、これまでに経験したことのない事態に直面してきました。

美術館、展覧会のみならず、トークイベントやワークショップなど、人が集い交流する催しも中止や延期となりました。

未だ特効薬のないこの未知のウイルスによる感染症で自由な生活が制限されていますが、横浜陶芸友の会『一大イベントの作品展』開催に向けての準備を事業部等で始めました。

横浜陶芸友の会会員として、お互いの陶芸に関する技術や知識を学び高めあい、それを通してその知識を認め合い、お互いに影響しあう中で感性を磨き上げた作品を皆様に観賞していただけますように多数出品されることを願います。

今回は、新型コロナ感染症対策に万全を期して受付方法、会場案内等役員一同気を引き締めて開催することといたします。

この対策等には今までとは違い受付、会場案内等に会員の方々のお手伝いを必要としますので、こちらもよろしくお願いいたします。

パンドラは、ゼウスの神より、あけてはならないとされる甕を渡された。
蓋を開けると、あらゆる禍が飛び出した。
慌てて蓋を閉めると、底に残っていたのは『希望』だった。
（ギリシャ神話より）

総務部より

9月に新しい会員が増えました。
高木公子（タカギ キミコ）さんです。
よろしくお願いいたします。

『第４２回　作品展』のお知らせ

今年は「作品展」の開催が危ぶまれていましたが、アンケートの結果を踏まえ会長や各部長と話し合い開催することになりました。

新型コロナへの対応もあり、準備や受付方法も例年と変えざるをえません。

参加者や来場者が減少するかもしれませんが、会員皆様の知恵と協力を得ながら盛り上げましょう。

【会期】令和３年１月12日（火）～17日（日）
【会場】かなっくホール　Ａ室
（ＪＲ東神奈川駅　下車３分）

【特設コーナー】「片口」
【申し込み締切り】令和３年１月６日（水）
【申し込み先】

※「出展作品一覧」も同封してください

※申し込み方法と作品展の詳細については、会報の11月号と一緒に会員の皆様に送付いたしました。

◎今年度は変更がありますので、会報や要綱の内容をよくお読みください。

【会場設営】
例年、皆様にお手伝いをお願いしていますが、密を避けるために少人数で設営を行います。担当者以外の出展者の方は「受付時間」に来場するようお願いいたします。
【受付時間】
令和3年1月12日（火）11時～
※開場は　13時　から
【搬出】　1月17日（日）16時より
※片付けは全員で行います。
【会場当番】
◎例年通りご協力お願いいたします。
【懇親会】今年度は、行いません。

❀❖❤✣✤✥❀❖❤✣✤✥❀❖❤✣

秋の焼成会（研修会）報告

専修部

【2020年度　秋の焼成会終わる】

今年は特にテーマは設けず、専修部がこれまで受け継いできた釉薬の中から、各自の好みの釉薬を伺いそれを用意しました。

9月27日（日）受付

9人の会員が参加し作品数は66点でした。個人所有の窯では限界のある大壺、花瓶、大皿、大鉢をはじめとしてセット皿や向付、徳利，ぐい呑みなど力作が持ち込まれました。

10月11日（日）待ちに待った釉掛け

最も多かったのが織部釉、次いで白萩釉、黄瀬戸、瑠璃などでした。

10月18日（日）作品の引き渡し

思いのほかの出来栄え(?)に満足の笑み。本来なら参加者が集まってお茶をしながら歓談で盛り上がるところですが、今年はコロナの影響で引き渡し後、早々に解散しました。

少し残念なのは参加者が年々少なくなってきていることです。

専修部へのご意見や希望などいつでもお寄せください。お待ちしております。

第41回　作品展』紹介③

本橋昭彦

昨年度の「作品展」の紹介が今回で終わります。いかがでしたでしょうか？

「第42回作品展」も開催することになりましたので、又、次回の作品展も掲載いたします。

ご協力、よろしくお願いいたします。

❀❖❤✣✤✥❀❖❤✣✤✥❀❖❤✣

「今年の作品」

「六角小鉢」信楽赤土　土灰釉
織部タルクマット・バナナ　電気窯

「終の住処（ついすみか）」古信楽荒土　自然釉　穴窯　還元焼成
「四角皿」古信楽赤土（荒）　自然釉　穴窯　ボタ餅還元焼成
「火襷花器」備前土　藁巻付　電気窯　酸化焼成

「木葉天目皿」信楽白土
椋の木葉　黒天目釉
電気窯　酸化焼成

葉を押さえるためのステンレスの板を持ち「木の葉天目」の説明をしてくれました

・「木の葉天目」は一回目を失敗しサンダーで全部はがし黒天目釉に「釉薬ボンド」を10％入れ刷毛で塗り直しました。

皿からはみ出すくらいの「椋の枝葉」を0.1㎜のステンレス板で押さえ700℃で素焼きをしてから1240℃で本焼きをしました。

あとの四枚はダメでしたが、この一枚だけ枝葉まできれいに葉脈が出ました。

残りがなぜ失敗したのかはわかりません。

「今年の作品」　大日方　毅

＜すべて 穴窯焼成です＞
「花器」 自然釉（灰被り） 信楽土
「花器（蹲る）」 自然釉（灰被り） 信楽土
「花器」 自然釉（灰被り） 越前土
「ビールグラス」 マット釉 唐津土
「ビールグラス」 唐津釉 唐津土

・今回のテーマは「穴窯焼成による灰被り」で、基本的には出来た物にあまり手を加えず穴窯のすぐ手前の所に置き灰や釉の塊などによる焼成作品です。

この作品は窯出しの時灰に40～50㎝埋もれていて色の変化も炭の黒や土の白や中の赤など色々出てきた作品です。

・これも同じなのですが灰による釉薬の垂れ具合が面白い作品です。

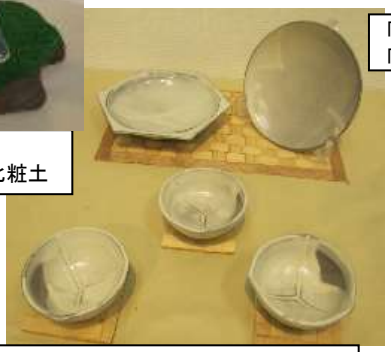
・この作品は窯出しの時どう言う訳か煉瓦がくっ付いていて水に浸しても剥がれないので一年ほど外に出しておきました。暑い寒い、晴れや雨といった自然の力で一年程たったある日、突然ポコッと煉瓦が取れてこの作品が出来ました。これも結構、灰に埋もれた中から出てきた作品です。

・これは釉薬を掛けたもので、「ビールを飲むには小さいよ。」と言われますが、私はこの位が好きなのでちょうど良いかな、と思っています。

「今年の作品」　吉川　勝

「抹茶茶碗」 五斗蒔 ガス窯 ネズミ志野
「湯呑み」 五斗蒔 ガス窯 ネズミ志野

「オブジェ（灯台）」
信楽白 電気窯 白化粧土



「六角皿」 信楽赤 灯油窯 白化粧土
「丸皿」 信楽赤 灯油窯 白化粧土
「小鉢（3点）」 信楽赤 灯油窯 白化粧土

「丸皿」 信楽赤 灯油窯 白＋黒化粧土
「湯呑み（3点）」 五斗蒔 電気窯 ルリ釉

・この灯台を皆さん「お城」だと思っているようです。もっと説明書きをすればよかった。この白色は粉引きをそのまま焼いたものです。遠くから見るとテカテカするのでそのまま焼き締めにしました。

「今年の作品」

石川　光子

「信楽片口鉢（3点）」信楽土　穴窯焼成　自然釉
「焼き締め葉皿　信楽土　穴窯焼成　自然釉
「苔鉢（2点）」信楽土　穴窯焼成　自然釉

「信楽引き出し壺」信楽土　穴窯引き出し焼成　自然釉
「信楽壺（2点）」信楽土　穴窯焼成　自然釉
「信楽壺」信楽土　都市ガス窯　松灰釉
「ミニミニ壺」信楽土　穴窯焼成　自然釉
「ぐい呑み（3点）」信楽土　穴窯焼成　自然釉
「味見　鉢（2点）」ぶれんど土　都市ガス焼成　松灰釉
「伊賀徳利」伊賀土　登り窯焼成　自然釉

作品展は3年振りです。右肩腱板断裂の手術の為まだ作品作りが出来ませんでした。

今回は前々の作品で参加させて頂きました。

この作品は、仲間と沼津の穴窯で焼成した物がほとんどです。

このビードロがきれいな「信楽引き出し壺」は穴窯で引き出し焼成したものです。

「今年の作品」

鍋島　弘義

私のは、生地が分厚く口が大きいということで、引き出しても割れなかったのですが、主人のは、口は大きかったのですが薄かったので家に帰ったらグシャグシャになりました。

陶芸をやる前に作品を見て「ああいうのが出来たらいいな～。」と思っていたので、作品を寝かせて焼成しました。

小さいのは、余った土を轆轤ではなく手捻りで作りました。

「弁天さんと干支のネズミ」

七福神の一人「弁天さん」の衣は呉須や色絵具で色々な色を出してみました。

今年の干支「ネズミ」は素焼きと白萩です。

お茶の香りを楽しもうと「茶香炉」を焼締めと黄瀬戸釉の2つ作ってみました。

ローソクの火力が強いのでもう少し高さがあればよかったと思いました。

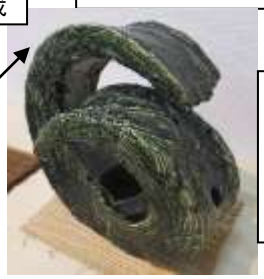
「茶香炉」
①焼き締め　②黄瀬戸

今年の「作品」

貝森俊司

「壺」　信楽土　穴窯焼成

「花器」信楽土荒　織部



上図右側面から

この「花器」の深い濃い緑色は素地に弁柄を塗ってその上に市販の織部をかけたものです。

「カップ＆ソーサー」
泥彩・透明釉

「志野　湯呑」

専修部で焼いてもらった「鼠志野」と自分で焼いた「志野」です。

自分で焼いた「志野」は水漏れするため透明釉を掛け焼き直しをしました。

白粘土のドベに弁柄と呉須で「泥彩」を作り、それを下地として塗り素焼きをしてから透明釉をかけました。

釉薬とはまた違った色合いになりました。

「今年の作品」　鈴木 貴久

ずらり並んだ全体作品

「黄瀬戸　湯飲み・ぐい呑み」
粘土；古陶黄瀬戸土（熊谷陶料）
釉薬；無農薬藁灰1：土灰1　たんぱん：硫酸銅

この白い点々の皿は、唐津の飴釉と黒錆釉で二度焼きし、その後穴の開いたパッチを貼り、その穴にワラ灰釉を5㎜位テンコ盛りにし、もう一度焼いています。ワラ灰釉が薄いと透明になったり鉄釉となじんだりするので厚くします。

「泥彩転写皿」 粘土；益子赤土
（益子焼協同組合）
下絵；唐津原土に見島土
釉薬；土灰透明・唐津飴釉（裏面）

こちらの市松模様の皿は「転写」の型作りです。ベニヤ板に布を張りマスキングテープで線を引き砂混じりの粘土を着色した泥漿を布に塗り粘土にかぶせて転写した後スライスして型にはめて皿にしてあります。模様を曲面に書くのは難しいが平面に描くのは楽にできます。最後にシリカ系透明釉を掛けるのですがカリ系だと模様がはっきり出るので面白くない。もう一つは鬼板を入れたので黒が濃く出ています。

「直火土鍋」
粘土；ベタライト耐火土鍋
釉薬；唐津飴釉

「鼠志野ぐい呑み」
粘土；もぐさ原土（熊谷陶料）
下絵；可児鬼板
釉薬；志野釉（焼成会）

「今年の作品」　古河内 滋子

「鬼瓦」 ガス窯　・サイズ七寸の鬼瓦（阿）（吽）
・富岡鬼瓦工房にて焼成（24時間かけ 1080℃焼成）
（950℃より 30 分間燻し焼することで炭素膜が付着）
・自分のオリジナルなので髭など自分なりに作りました。

5 年ほど前に鬼瓦教室に参加する機会に恵まれ、普段半磁土で生活器を作っている私にとっていぶし瓦のもつ風合いにとても魅力を感じ、自分の窯で焼けない「あたたかで、やわらかな」作品を作りました。

「上絵付け」 電気窯
・市販の白い磁器に上絵付け
（上絵での焼成は水分を嫌う為　本焼後の窯で焼成）

・この絵は筆による手書きです。「大倉陶苑」の先生に教わり、経験したという痕跡を残すために葉の小さな丸は綿棒で色を抜きました。葉の葉脈の白い部分もふき取って書いてあります。

「第 24 回 瓦・造形展で「伝統技能」をいただいた作品の一部

「錬り込み」は40年位、仕事でやっていました。生地の厚みは、その物により扱いは変えています。
3㎜～7㎜位です。

色は錬り込み顔料ですが組んでいる時には色が見えないので食紅など毒性のない物で加色して目に見えるようにしています。

陶陶さん

第 100 号

あかほし

ホームページもチェック!!

横浜陶芸友の会

検索

http://www20.atpages.jp/tomonokai/

横浜陶芸友の会だより
第 178 号
（令和 2 年 11 月 15 日発行）

「今年の作品」

井上　明

水は使いすぎると割れる原因になるので最小限度で使います。手の速度、硬さ、乾燥に注意が必要です。

「黄瀬戸長皿」もぐさ土・ガス窯焼成　オリジナル釉（1B 釉）
「志野長皿」もぐさ土・ガス窯焼成
「織部長皿」もぐさ土・ガス窯焼成

「黄瀬戸中鉢（2 点）」もぐさ土・ガス窯焼成　オリジナル釉（Q3 釉）
「黄瀬戸湯呑、ぐい呑み（各 4 点）」もぐさ土・ガス窯焼成　オリジナル釉（Q3 釉・1B 釉・GAR 釉・2B 釉・Q3 釉）

「志野花器（2 点）」もぐさ土・ガス窯焼成
「絵志野茶碗」もぐさ土・穴窯焼成
「紅志野湯呑（2 点）」もぐさ土・ガス窯焼成

・この織部は還元をかけても赤くならない物で、炭酸マグネシウムを入れています。

・この薪窯で焼いたピンク地の「志野」は何も掛けていません。土の鉄分と強還元で焼いたのが作用し徐冷を 24 時間で 950℃まで落として赤が出てきました。ピンクが出るのは生地に鉄分が入っていて還元で焼くと鉄絵が掛かってない所で出る。下地の鉄分と作用する方法があります。薪窯をやめガス窯に変えた時、ピンクは難しいだろうな？と思い下絵に紅呉須と土をブレンドした物を掛けてみました。

最近志野も色を付ける人が多くなってきました。

呉須を塗って「紺色の志野」や下絵を工夫して現代風な志野などがあります。

色々試してみたらいいと思います。

【編集後記】

・パソコンが壊れインターネットの環境を再整備しましたが使い勝手が変わり混乱しております。

それで、今号の編集には参加しませんでした。

（季楽軒）

・欧米でも第一波を凌ぐ勢いでコロナ感染が進んでおり、日本でも東京はもちろんのこと北海道や大阪など全国的にまた広がりを見せ始めております。

そんな環境の中で来年の作品展を事業部中心に進めておりますが、我が「横浜陶芸友の会」の一大イベント、「作品展」が無事開催されることを願うばかりです。

（大日方）

・会報の最後を飾る「陶陶さん」が 100 号になりました。「あかほしさん」ありがとうございます。

これからもよろしくお願いいたします。

「作品展」の紹介も紙面の都合で一部しかできない所もありますが、今年度の「作品展」でも、ご協力お願いいたします。

（鍋島）